



Title	迂言比較構文における史的発達に関するコーパス研究
Author(s)	本多, 尚子
Citation	北海道教育大学紀要. 人文科学・社会科学編, 69(2): 43-49
Issue Date	2019-2
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/10344">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/10344</a>
Rights	

## 迂言比較構文における史的発達に関するコーパス研究

本 多 尚 子

北海道教育大学札幌校英語学研究室

### A Corpus-based Study of the Development of Periphrastic Comparatives

HONDA Shoko

Department of English Linguistics, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

#### 概 要

本研究は、迂言比較構文の用例に関する史的コーパス調査及び分析を行い、その結果を踏まえ、迂言比較構文の史的発達過程を解明することを目的としている。特に、古英語期や初期中英語期における迂言比較構文の用例には、現代英語の迂言比較構文が持つ特徴が観察されず、後期中英語期から17世紀後半にかけての史的变化を経て、18世紀初頭には、現代英語とほぼ変わらない迂言比較構文の用法が確立されていったことをコーパス調査結果と共に明らかにする。

#### 1. 導 入

現代英語では、比較構文は、(1a) のような形容詞あるいは副詞 + 比較を表す屈折接辞 *-er* を含む屈折比較か、(1b) のような比較を表す *more (less) + 形容詞あるいは副詞の原級* を含む迂言比較かのどちらかの形式で表され、特に、前者は主に1音節の形容詞を含む場合に、後者は主に3音節以上の形容詞を含む場合に多く用いられるとされている。

- (1) a. She is taller than he.
- b. Sleeping is more important than taking medicine.

以下では、(1a) のような比較構文を屈折比較構文、(1b) のような比較構文を迂言比較構文とそれぞれ呼ぶことにする。

屈折比較構文は、古英語期から現代英語期に至るまで一貫して高頻度で存在する一方、迂言比較構文は初期中英語期において散発的に出現し、後期中英語期から現代英語期においては時期ごとに生起頻度の増減は見られるが、継続的に存在している。他方、荒木・宇賀治(1984)では、両者の用法は、現代英語も含めて、いつの時代の英語においても程度の大小はあるが不安定であるとも述べており、特に、初期近代英語期半ば

から後期近代英語期初頭にかけて見られる両者の用法と現代英語期において見られるそれらの用法との違いを明らかにしている。さらに、荒木・宇賀治（1984）は、現代英語期において見られる用法の発達に関係するものとして、16世紀後半から屈折比較構文をより短い親しみのある語に限定する傾向が生まれ、それが17世紀後半以降顕著になったことが影響していると述べている。他方、この間の迂言比較構文の傾向の変化については言及がなされていない。私の知る限り、迂言比較構文の史的变化については、古英語期から初期近代英語期に至るまでの史的コーパス調査を行い、その結果を踏まえて、当該構文の発達過程を精緻に分析しようとした研究はない。

本稿の構成は以下の通りである。2節では、迂言比較構文に関する通時的データを概観する。3節では、迂言比較構文の通時的発達に関する先行研究を概観し問題点を指摘する。4節では、迂言比較構文の史的発達に関し理論的に説明可能な新たな分析を提案する。5節は結論である。

## 2. 迂言比較構文に関する通時的データ

### 2. 1. コーパス調査結果

迂言比較構文の発達に関するより精緻な分析を提案するために、2. 1節では、古英語期から後期近代英語期までの史的コーパス、すなわち、The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE), The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second edition (PPCME2), The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME), The Penn Parsed Corpus of Modern British English (PPCMBE) を用いた調査結果を示す<sup>1</sup>。本調査では、迂言比較構文の生起頻度を算出し、その変化を明らかにする。なお、迂言比較構文の中でも、形容詞を含むものの方が副詞を含むものよりも用例が多く、前者の方が音節の違いといった特徴も生じやすいことから、本節では形容詞を含む事例に限って結果を示す。さらに、各時代区分における迂言比較構文の特徴を示す手がかりとして、迂言比較構文に含まれる形容詞の音節数に着目し、その生起頻度と割合の変化も示す。

表1及び図1に、古英語期から後期近代英語期における迂言比較構文の生起頻度を示す。

表1 古英語期から後期近代英語期における迂言比較構文の生起頻度 (50万語当たり)

	OE	M1	M2	M3	M4	E1	E2	E3	L1	L2	L3
迂言比較構文	1.25	12.79	47.88	191.71	59.59	151.46	139.22	347.12	291.86	375.06	168.02

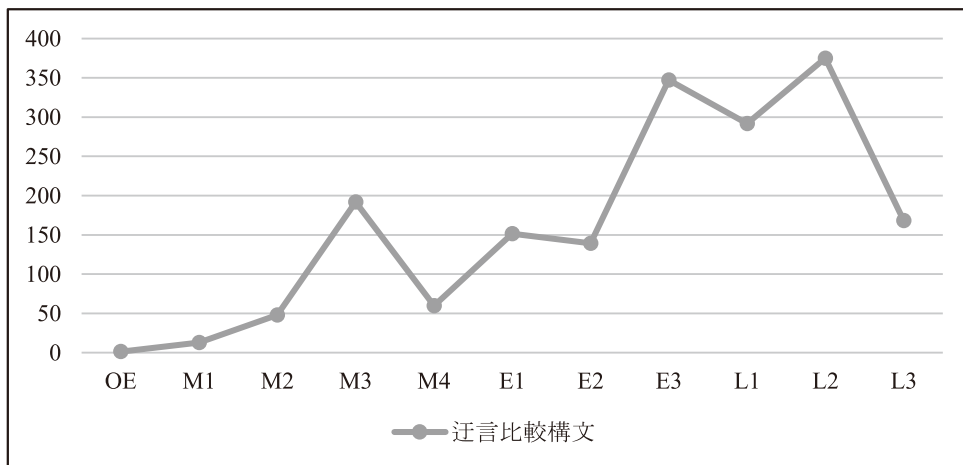


図1 古英語期から後期近代英語期における迂言比較構文の生起頻度

表1及び図1では、迂言比較構文は、OE期に出現し、M1期まではその生起頻度は著しく低かったものの、その生起頻度自体は増加傾向にあり、特にM2-3期、M4-L2期はその傾向を強めている。

さらに、表2及び図2に各時代区分における迂言比較構文に含まれる形容詞の音節数の割合の変化及び生起頻度を示す。

表2 各時代区分における迂言比較構文に含まれる形容詞の音節数の割合及び生起頻度 (50万語当たり)

	OE	M1	M2	M3	M4	E1	E2	E3	L1	L2	L3
1音節	1.25	7.67	31.92	89.38	13.46	43.15	30.23	48.93	13.64	41.49	8.31
2音節	0	5.12	15.96	63.47	36.52	58.12	53.3	147.71	109.11	119.49	64.62
3音節以上	0	0	0	38.86	9.61	50.19	55.69	150.48	169.11	214.08	95.09

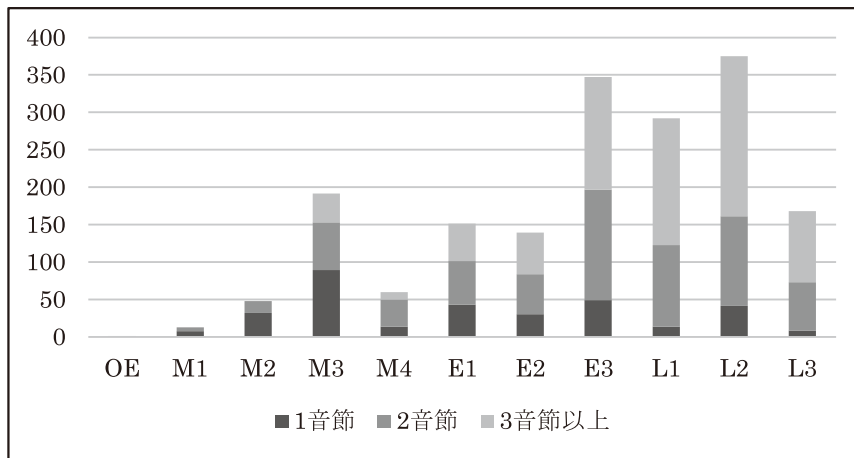


図2 各時代区分における迂言比較構文に含まれる形容詞の音節数の割合及び生起頻度

図2から、まず、OE期の迂言比較構文の生起頻度はかなり低く、かつ、当該構文が含む形容詞の音節は全て1音節である等、現代英語の迂言比較構文が持つ特徴とは全く異なる性質を持っていたことが分かる。M1期も、若干の生起頻度の増加は見られるものの生起頻度自体は依然として低く、3音節以上の形容詞の用例はOE期と同様でない。他方、OE期と異なる特徴として1音節の形容詞だけでなく2音節の形容詞を含む用例も現れ始めている。M2期になると、迂言比較構文の生起頻度は、M1期と比べ約4倍に増加するが、この時期においても1音節の形容詞と2音節の形容詞を含む用例のみで、3音節以上の形容詞を含む用例はない。M3期に、迂言比較構文の生起頻度はさらに激増し、屈折比較構文を除く二重比較構文等の他の比較構文の変種よりもはるかに高い頻度を示す。特に、このM3期に3音節以上の形容詞を含む迂言比較構文が出現し、以降現代英語に至るまで当該用法が保持されている点は注目し得る。その一方で、3音節以上の形容詞を含む用例はまだ当該時期の迂言比較構文の用例全体のうち20%ほどを占めているにすぎず、1音節の形容詞を含むものが最も多く約47%、2音節の形容詞を含むものが約33%と、この時期においても現代英語の迂言比較構文とは異なる特徴を示す。その後、M4期は、迂言比較構文自体の生起頻度はM2期並みに戻るが、当該構文に含まれる形容詞の音節数の割合について、初めて2音節の形容詞を含む用例が最も多くなり、当該時期の迂言比較構文の用例全体のうち約61%を占めるようになり、1音節の形容詞を含むものは約23%、3音節以上の形容詞を含むものは約16%と、1音節の形容詞を含む用例と3音節以上の形容詞を含む用例の生起頻度の差がかなり縮小している。E1期は、迂言比較構文自体の生起頻度は再び増加するが、当該時期の迂言比較構文に含まれる形容詞の音節数の割合は、2音節の形容詞を含む用例が最も多い点はM4

期と変わらないが、3音節以上の形容詞を含む用例の割合が1音節の形容詞を含む用例の割合を初めて上回った他、2音節の形容詞を含む用例が38%、3音節以上の形容詞を含むものが33%、1音節の形容詞を含むものが28%となり、3種類の割合の差はかなり縮まっているといった特徴がある。E2期に入ると、迂言比較構文自体の生起頻度はE1期とほぼ変わらない一方、当該構文に含まれる形容詞の音節数の割合が、3音節以上の形容詞を含む用例が最も多く40%となり、2音節の形容詞を含むものが38%と、両者を合わせると当該時期の迂言比較構文の用例全体のうちの約8割を占めている。E3期になると、3音節以上の形容詞を含む用例と2音節の形容詞を含むものが共に43%と、両者を合わせると当該時期の迂言比較構文の用例全体のうちの約86%となる等当該傾向がますます強まる他、迂言比較構文の生起頻度自体も著しく増加する。L1期になると、3音節以上の形容詞を含む用例は約57%に達し、2音節以上の形容詞を含む用例の約32%を合わせると、当該時期の迂言比較構文の用例全体のうちの約9割を占めるに至る。L2期も同様の傾向を示す他、迂言比較構文自体の生起頻度自体も今回調査した範囲の中で最大となる。L3期に、当該構文自体の生起頻度は下がる一方、当該構文に含まれる形容詞の音節数の割合については、L1期とL2期に比べてそれほど変化はない。

上記の調査結果から、迂言比較構文が3音節以上の形容詞を含む場合によく用いられるという特徴はE2期という比較的現代に近い時期から生じた特徴であり、その傾向は現代英語期に近づくにつれより強められていったことが明らかとなった。従って、本稿では、詳細には4節で論じるが、OE期からE1期にかけての迂言比較構文の史的変化と、E2期以降の当該構文の史的変化には、それぞれ異なるメカニズムが関与していると主張し、それぞれの変化を理論的に説明可能な分析を提案する。

### 3. 先行研究

#### 3. 1. 荒木・宇賀治 (1984)

荒木・宇賀治 (1984) では、Quirk et al. (1985) やBarber (1964) やFries (1999) が類型論的な共時研究成果として示した総合的言語から分析的言語へと向かう英語の偏流 (drift) に従い、比較構文の通時的発達について以下のように分析している。OE期においては、原則的には形容詞の比較級は屈折接辞によって表されていた。しかし後に、屈折比較に代わる新用法として、英語に迂言比較が導入された。また、この屈折比較から迂言比較への変化は、総合的言語から分析的言語へという言語変化の偏流に沿う変化であったため、迂言比較は着実にその生起頻度を増加させたとしている。

しかしながら、彼らの分析には問題がある。荒木・宇賀治 (1984) は、総合的言語から分析的言語へと向かう英語の偏流 (drift) に従い、迂言比較構文がその用法を確立させてきたとしているが、Kytö and Romaine (2006) やMondorf (2012) は、自らのコーパス調査の結果に基づき、17世紀中は屈折比較から迂言比較へ、すなわち、総合的言語型システムから分析的言語型システムへという当該偏流とは逆の変化を示す形容詞も少なからず見られる他、Kytö and Romaine (1997:335-336) による調査の結果によると、後期中英語期から後期近代英語期にかけては、形容詞比較構文のうち屈折比較構文の占める割合の方がむしろ増加傾向を示しており、後期近代英語期には屈折比較構文：迂言比較構文がおおよそ4:1の比率であり、当該傾向は現代英語まで引き継がれているとしている等、史的変化における総合的言語から分析的言語への偏流の存在を否定する経験的証拠が少なからず発見されている。また、総合的言語から分析的言語へと向かう偏流は、豊かな屈折接辞により表されていた意味的・文法的機能が、屈折の水平化・消失により十分に表示することができなくなったため、その代わりとして、迂言的な表現を発達させたのだと一般的に解釈される。このことが正しければ、こうした迂言的な表現をより必要とするのは、形態統語的により複雑な語彙、すな

わち、3音節以上の語彙であると予測される。しかしながら、実際には初期の迂言比較構文において用いられる頻度が高かったのは、1音節の形容詞であり、3音節以上の形容詞は皆無である。荒木・宇賀治（1984）の分析では、なぜ初期の迂言比較構文において当該の傾向が見られるのかを説明できない。

### 3. 2. Mondorf (2012)

英語の比較構文における、総合的言語から分析的言語システムへの単純な一本化の存在を否定している研究として、Mondorf (2012) や Kytö and Romaine (2006) が挙げられる。特に、Mondorf (2012) は、後期近代英語における比較級の変種に関する分布は、新たなる機能的に動機付けられた分業 (functionally-motivated division of labor) であるとし、形態統語論的变化の動機のみに基づく変化の結果であるとする従来の分析を否定している。特に、Kytö and Romaine (1997:335-336) による調査の結果として、形容詞比較構文のうち、迂言比較構文ではなく、屈折比較構文の占める割合が、後期中英語期から後期近代英語期にかけてむしろ増加傾向を示しており、後期近代英語期には屈折比較構文：迂言比較構文がおおよそ4:1の比率であり、当該傾向は現代英語まで引き継がれているという点は注目に値する。

しかし、Mondorf (2012) の研究は、初期近代英語期以降の英語を対象としており、古英語期や中英語期の迂言比較構文の発達については説明が与えられていない。

## 4. 迂言比較構文の史的発達

### 4. 1. 言語変化の拡散性

本稿では、迂言比較構文において用いられる音節別の種類の拡張とそれらの割合の変化に着目し、当該構文の史的発達、特にOE期からE1期における発達には、De Smet (2013) で言及されている言語変化の拡散性が、特に当該構文に現れうる形容詞の種類という観点で関わっていると仮定する。OE期においては、迂言比較構文に現れうるのは1音節の形容詞のみであったが、M1期以降は、これに加え、2音節の形容詞も許されるようになり、その生起頻度は全体として増加傾向を示している。他方、M1-3期の間は、迂言比較構文において最もよく現れうるのは1音節の形容詞であるという状況に変わりはなく、先の増加傾向変化は比較的緩やかに進んだと考えられる。また、特に、M3期においても一つ注目すべき点として、当該時期以降、3音節以上の形容詞も迂言比較構文に現れうるようになったことが挙げられる。この3音節以上の形容詞の生起頻度も全体として増加傾向を示しているが、M4-E1期の間は、迂言比較構文において最もよく現れうるのは2音節の形容詞であり、3音節以上の形容詞ではなかった。E2期以降は、現代英語と同様に、迂言比較構文には3音節以上の形容詞が主に含まれていることが分かる。

### 4. 2. 提 案

本稿では、迂言比較構文の発達について、De Smet (2013) で採用されている言語変化の拡散性と、Mondorf (2012) の屈折比較構文と迂言比較構文との機能的に動機付けられた分業を用いた新たな分析を提案する。

まず、OE期においては英語史を通じ一貫して生起頻度が高いとされる1音節の形容詞を含む屈折比較構文の用例の影響を受け、1音節の形容詞を含む迂言比較構文の用例が出現した。M1期になると、1音節の形容詞を含む用例からの類推により、言語変化の拡散性に従って2音節の形容詞を含む用例も許されるようになる。2種類の用例の生起頻度は、M3期まではこの類推の元となった1音節の形容詞を含む用例を中心として増加傾向を示している。他方、生起頻度が増加した2音節の形容詞を含む用例との間にも新たな類推

が生じ、M3期に3音節以上の形容詞を含む用例が出現する。その結果、迂言比較構文は、屈折比較構文と同様に、1音節の形容詞、2音節の形容詞、あるいは3音節以上の形容詞を含みうる異形として認識されるようになり、両構文との機能的分業のメカニズムが働くようになった<sup>2</sup>。他方、M3-4期にかけては3音節以上の形容詞を含む用例はまだ生起頻度が乏しかったことから、両者の分業は、1音節の形容詞を含む用例と2音節の形容詞を含む用例との間でなされ、迂言比較構文は2音節の形容詞を含む用例を主に担うようになった。この傾向と関連する興味深い現象として、二重比較構文の衰退、その後の消失が挙げられる。二重比較構文は、筆者のコーパス調査によると、M1期に出現し、M2期にその生起頻度のピークを迎えた後、M3期以降減少傾向に転じ、E2期を最後に消失している。当該構文の主な2つの特徴として挙げられるのが、迂言比較の*more*と屈折比較語尾の*-er*が同時に現れることと、当該構文に含まれるのが主に1音節の形容詞であるということである。実際、筆者のコーパス調査でも当該構文の用例はほとんど1音節の形容詞を含むものであり、M3期以降明らかな減少傾向を示し、E2期を最後に消失している。本稿での分析が正しければ、この二重比較構文の衰退・消失は、屈折比較構文と迂言比較構文の分業が明確にされていく中で、迂言比較の*more*と1音節の形容詞という当該分業に反する要素を二重比較構文が含んでいたために生じたと説明される。

ここで再び迂言比較構文の発達に話を戻すと、E1期には、2音節の形容詞を含む用例が増えたことで、類推による3音節以上の形容詞を含む用例の生起頻度が激増し、他の2種類の用例の頻度と拮抗するようになった。その結果、3音節以上の形容詞におけるこれ以上の形態統語的複雑性の増加を避けながら比較の意味を伝達できる迂言比較構文がMondorf (2012) が指摘するように機能的観点からもより好まれたため、E2期以降、迂言比較構文は主に3音節以上の形容詞を含むようになったと考える。

## 5. まとめ

本稿では、史的コーパス調査結果を踏まえ、迂言比較構文に関する通時的データを概観し、迂言比較構文の史的発達に関し理論的に説明可能な新たな分析を提案した。迂言比較構文の史的発達は、従来の総合的言語から分析的言語への偏流 (drift) を仮定する分析や屈折比較構文と迂言比較構文との間の機能的に動機付けられた分業のみを仮定する分析では十分に捉えることはできず、言語変化の拡散性に基づく、当該構文に現れうる形容詞の種類の変遷の存在と、その後の屈折比較構文と迂言比較構文との機能的に動機付けられた分業の両方を仮定する分析によって初めて説明が与えられると論じた。

## 注

1. 各コーパスの時代区分は、YCOEは、O1 (-850), O2 (850-950), O3 (950-1050), O4 (1050-1150) であり、PPCME2はM1 (1150-1250), M2 (1250-1350), M3 (1350-1420), M4 (1420-1500) であり、PPCEMEはE1 (1500-1569), E2 (1570-1639), E3 (1640-1710) であり、PPCMBEは、本来の時代区分では一部PPCEMEの期間との重複が見られたため以下の修正した時代区分、L1 (1711-1779), L2 (1780-1849), L3 (1850-1914) を用いる。なお、各時代区分の表示は使用したコーパスに従う。
2. 機能的分業は、英語史においては、語彙の面では、2重語や3重語の発達において、文法面では、関係代名詞の史的発達 (宇賀治 (2000:244-256) を参照) 等においてもその存在が指摘されている。

## 附 記

本論文は、JSPS科研費・若手研究（代表：本多尚子，課題番号JP18K12408）の助成を受けた研究成果の一部である。

## 参考文献

- 荒木一雄・宇賀治正朋（1984）『英語史III』大修館書店，東京。
- Barber, Charles L. (1964) *Linguistic Change in Present-Day English*, André Deutsch, London.
- De Smet, Hendrik (2013) *Spreading Patterns: Diffusional Change in the English System of Complementation*, Oxford University Press, Oxford.
- Fries, Charles C. (1999) "Postnominal Modifiers in the English Noun Phrase," in Peter Collins and David Lee eds., *The Clause in English*, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia, 93-110.
- Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME), University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Kroch, Anthony, Beatrice Santorini, and Ariel Diertani (2010) *The Penn Parsed Corpus of Modern British English* (PPCMBE), University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Kroch, Anthony and Ann Tayler (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second edition* (PPCME2), University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Kytö, Merja and Suzanne Romaine (1997) "Competing Forms of Adjective Comparison in Modern English: What Could Be *More Quicker* and *Easier* and *More Effective*?," In Terttu Nevalainen and Tarkka Leena Kahlas eds., *To Explain the Present: Studies in the Changing English Language in Honour of Matti Rissanen*, Société Néophilologique, Helsinki, 329-352.
- Kytö, Merja and Suzanne Romaine (2006) "Adjective Comparison in Nineteenth-Century English," in Merja Kytö, Mats Rydén and Erik Smittberg eds., *Nineteenth-Century English: Stability and Change*, Cambridge University Press, Cambridge, 194-214.
- Mondorf, Britta (2012) "Late Modern English: Morphology," in Alexander Bergs and Laurel J. Brinton eds., *English Historical Linguistics: An International Handbook*, 2 vols, Mouton de Gruyter, Berlin, 843-869.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk, and Frank Beths (2003) *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose* (YCOE), University of York, York.
- 宇賀治正朋（2000）『英語史』開拓社，東京。

(札幌校准教授)



